

No. 59

October.
20262016年
朝日がん大賞
受賞2005年
保健文化賞
受賞

NEWSLETTER

第35回学術集会
米子大会 開催報告

第35回日本がん登録協議会学術集会を、2026年6月11日から13日まで、鳥取県米子市の米子市文化ホールで開催いたしました。本学術集会のテーマは、「がん登録情報のその先へ～科学と政策をつなぐ架け橋～」としました。全国がん登録制度の開始から10年を経て、質の高いがん登録情報が蓄積される中、情報を正確に「集める」ことに加え、研究、医療、行政施策、地域保健に「活かす」ことが、これまで以上に求められています。本大会では、がん登録の精度向上と情報の利活用を二つの柱としてプログラムを構成しました。

初日のがん登録実務者研修会では、「がん登録の精度向上に直結する診断理解と多重がん判定」をテーマに、病理診断報告書や画像診断報告書の読み方、施設間で異なる診断情報の整理、多重がん判定ルール of 最新動向について、各分野の専門家から実践的に解説いただきました。引き続き開催した実務者情報交換会「実務でGo!」では、日常業務で直面する課題や工夫について参加者同士が意見を交わし、所属や地域を越えて経験を共有する貴重な機会となりました。

2日目の教育講演では、安来市加納美術館名誉館長の加納佳世子先生に、「今こそ世界平和を一加納莞菴(かんらい)の想いをつなぐ」と題してご講演いただきました。フィリピンの戦犯釈放と赦免に尽力した加納莞菴の歩みを通して、健康づくりの基盤となる生命の尊厳や平和について考える貴重な機会となりました。

利活用委員会企画シンポジウムでは、臨床研究、院内がん登録、病院管理、自治体におけるがん検診の精度管理など、多様ながん登録情報の活用事例が紹介されました。学術委員会企画シンポジウムでは、がん医療の均てん化・集約化の検討に向けて、国立がん研究センターからの提供データをどのように活用するかが議論されました。いずれの企画でも、がん登録情報を単なる統計資料にとどめず、医療提供体制の改善や政策形成につなげるための具体的な課題と可能性が示さ

OZAKI Yoneatsu

尾崎 米厚

鳥取大学
第35回学術集会 会長

れました。藤本伊三郎記念がん登録学術奨励賞受賞講演、一般口演、ポスター発表においても、全国がん登録・地域がん登録を用いた疫学研究、がん患者の受療行動、医療の集約化、登録業務へのAI活用など、幅広い成果が報告され、活発な議論が行われました。

情報交換会にも多くの方にご参加いただきました。久しぶりの再会を喜ぶ姿に加え、実務者、研究者、臨床医、行政担当者が立場を越えて交流する様子が各所で見られ、本協議会の学術集会が人と人をつなぐ場であることを改めて実感しました。

現地参加者は学術集会が約260名、実務者研修会が約150名でした。7月1日から開始したオンデマンド配信への参加者を含めると、現時点で学術集会は300名弱、実務者研修会は200名弱の参加登録をいただいています。遠方等のため米子にお越しいただけなかった方にも、講演やシンポジウム、口演発表をご覧いただく機会を提供できたことをうれしく思います。

本大会を通じ、がん登録情報は「集めて公表する」段階から、その情報を医療や地域の課題解決に結び付ける段階へ進みつつあることを強く感じました。一方、その前提となる登録精度の確保と実務者の継続的な育成も、今後変わらず重要です。「精度」と「利活用」を往還しながら、科学的根拠に基づくがん対策へつなげることが、私たちに課せられた役割であると考えます。

最後に、ご参加、ご講演、ご発表いただいた皆様、座長ならびに関係者の皆様、ご支援いただいた協賛企業・加納美術館、そして大会運営を支えていただいた組織委員、事務局、学生スタッフの皆様に、心より御礼申し上げます。米子大会で生まれた議論とつながりが、今後のがん登録とがん対策の発展につながることを願っております。